『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿―第六帖（14）木～紅葉―

福田智子

『古今和歌六帖』は、約四千五百首の歌を、二十五項目、五百十七題に分類した類題和歌集である。収載歌には、『万葉集』『古今集』『後撰集』など、出典の明らかな歌もある一方、現在では出典未詳と言わざるを得ない歌もある。本稿では、「木」から「紅葉」までの題に配されている出典未詳歌、九首について注釈を施す。

凡例

一、本稿は、『古今和歌六帖』所載の和歌について、考証の結果、出典の見出せなかった歌について注釈を加えるものである。本稿では九首を収めた。

二、歌番号は、『新編国歌大観』の通し番号を用い、歌題を（　）を付して記す。

三、底本は、『新編国歌大観』と同じく、宮内庁書陵部蔵桂宮本とする。

四、本文は、踊り字を解消して当該の文字に改め、歴史的仮名遣いに統一する。本文を校訂した場合には、もとの本文を（　）に入れて傍記する。また、私見によって濁点を付す。さらに、送り仮名など、底本にない文字を補った場合には、本文の右に「・」を付す。ただし、漢字仮名の区別は底本のままとする。

五、校異は、漢字・仮名の表記の違いや仮名遣いの相違は示さず、語の異なりのみを示す。諸本とその略称は次のとおりである。

○永青文庫蔵北岡文庫本　略称（永）
○肥前島原 松平文庫本　略称（松）
○内閣文庫蔵和学講談所旧蔵本　略称（和）
○内閣文庫蔵林羅山旧蔵本　略称（羅）
○神宮文庫蔵林崎文庫旧蔵本　略称（林）
○神宮文庫蔵宮崎文庫旧蔵本　略称（宮）
○田林義信氏旧蔵本　略称（田）
○ノートルダム清心女子大学図書館蔵黒川本　略称（黒）
○寛文九年版本　略称（寛）

なお、諸本本文は、主として国文学研究資料館所蔵のマイクロ・紙焼き資料に拠ったが、次の三本については個々の資料に拠った。

（永）細川家永青文庫叢刊３『古今和謌六帖（下）』（汲古書院、昭和五十八年一月）所収の影印

（松）肥前島原 松平文庫所蔵の原本および紙焼き資料

（寛）架蔵本

六、他出には、『古今和歌六帖』からの引用と思われる歌について、歌集の名称（『新編国歌大観』の目次に拠る）、巻数、部立、歌番号、歌題、詞書、作者名、歌本文、左注を順に示す。

七、考察中の和歌の引用は、とくに断らない限り、『新編国歌大観』に拠る。引用形式は、原則として、「和歌本文」（歌集名・部立・歌番号・作者名・詞書）とする。『万葉集』の番号は、新・旧の順で表記し、本文には適宜漢字を当てる。なお、必要に応じて、歌集名に底本の名称を冠することもある。

八、巻末には、木～紅葉題の歌（四〇二四～四〇九一番）の別出歌一覧を付す。

注釈

四〇二八（木）　　おなじ（伊勢）

【本文】

たがためにこれるなげきをうちつけにいままでなどか花さかずして

【校異】○たかためにーたかためと（に）（永）

【語釈】○これるなげきを　「樵れる投げ木」と「凝れる嘆き」との掛詞。「を」は間投助詞。文末にあって活用語の連体形または体言に付く。詠嘆。　○うちつけに　ふとしたきっかけで、どうしようもなく、にわかに心が進むさま。第二句の「これる」と結句の「さかず」の両方を修飾すると見た。　○花さかず　「花が咲かない」意に、「期待が報われない」意を重ねる。

【通釈】あなた以外の誰のために、にわかに伐った薪なのか。今までなぜか、花がにわかに咲くということもなく。（あなた以外の誰のせいで、にわかに尽くす歎きなのか。今までなぜか、あなたがにわかに振り向いてくれるということもなく。）

【他出】なし

【考察】

当該歌は、「たかためにこれるなけきをうちつけに匂もしらぬ我におほする」（正保版本伊勢集・一七四）と、『友則集』五五番にも載る「今までになどかは花のさかずしてよそとせあまり年ぎりはする」（後撰集・雑一・一〇七七・贈太政大臣・紀友則まだつかさたまはらざりける時、ことのついで侍りて、年はいくらばかりにかなりぬるととひ侍りければ、四十余になんなりぬると申しければ）のそれぞれの上句を、上句と下句として組み合わせ、音数を整えた本文になっている。つとに『古今和歌六帖標注』が指摘するように、おそらく『古今六帖』には、本来、これら二首の歌がこの順序で配されていたのであろう。「木」題の歌として、前者は「投げ木」、後者は「年ぎり」（樹木が年によって実を結ばないこと）の語によって採られたものと考えられる。

ちなみに、『古今六帖』では、次の四〇二九番歌は、諸本いずれも「はるのの」とのみあり、本文を脱している。この歌について、やはり『古

今和歌六帖標注』は、先の『後撰集』一〇七七番歌に対する返歌、「はるばるのかずはわすれず有りながら花さかぬ木をなにゝうゑけん」（後撰集・雑一・一〇七八・返し　とものり）であったことを示唆している（『友則集』五六番にも）。初句「はるばるの」が「はるのの」に誤写されることは、踊り字の読み違いや文字の入れ替わりの可能性を考慮すれば、想像に難くない。また、「花さかぬ木」という語句によって「木」題に入集されるという点も首肯されよう。

　このように、「木」題の末尾は、本文の乱れが甚だしく、当該歌も、本来、二首の歌であったものが、おそらく目移りによって一首にまとめられたものと推察される。その結果、掛詞「投げ木／嘆き」「樵る／凝る」によって、花が咲かなかった木を薪として伐るという意に、報われなかった恋に悲歎を尽くす意を重ねた歌と読める本文になっている。

四〇三〇（しをり）

【本文】

　あづま路のさやのなかやましげくとも君きまさねばをり（おも）かけもせじ

【校異】○さやのなかやま―さや（の）。中山（林）　○君きまさねは―君きまさねと（和・林・宮）

【語釈】○しをり　山道で、木の枝を折って目印にすること。道しるべ。○あづま路　都から東国地方に至る道筋。東海道、東山道。ここでは東海道を指す。　○さやのなかやま　静岡県掛川市東端の峠。平安時代から東海道の難所の一つとして知られた。　○しげくとも　「しげし」は、草木が繁茂しているさま。人、とくに恋人の訪れがないことを示す（「考察」参照。）。　○をりかけ　諸本「おもかけ」。いまは、「をりかけ」の誤りかとする契沖『和歌拾遺六帖』の説に従う。「をりかく」は、折って引き掛ける意。

【通釈】東海道の佐夜の中山は、草木が繁茂していても、あなたはおいでにならないので、目印の木の枝を折って掛けることもすまい。

【他出】なし

【考察】

　かつては小夜の中山を通ってやって来ていた恋人も、今は通って来なくなってしまった。もはや、草木が繁茂する道に、我が家への目印を付けても無駄であると嘆く女性の歌である。

　当該歌の題「しをり」が、そのまま和歌に詠まれる例は、必ずしも多くはない。平安中期までの例としては、『古今六帖』の出典未詳歌、「しをりしてゆかましものをあひづ山いるよりまどふ道としりせば」（第二・八七四・山）、「したひもはとけてやつげぬたまぼこのしをりもしらぬ空にわぶれば」（第五・三三四五・ひも）の他、「しをりしてゆくたびなれどかりそめのいのちしらねばかへりしもせじ」（大和物語・第五十四段・七三・右京大夫宗于の君三郎）、「しをりせんさしてたづねよずあしひきの山のをちにて跡はとどめつ」（人丸集・二五一・むさし）といった歌を挙げるにとどまる。

　草木が茂る道は、「大野路は繁道茂路繁くとも君し通はば道は広けむ」（万葉集・巻一六・三九〇三・三八八一・越中国の歌四首）では、恋路の妨げとして詠まれ、また、「山守が里辺に通ふ山道そ繁くなりける忘れけらしも」（万葉集・巻七・一二六五・一二六一）では、恋人が通って来なくなったことを示す。当該歌は後者の例に属するものであろう。

　「あづま路のさやのなかやま」の例は、早い例としては、「東路のさや

の中山なかなかに見えぬものからこひしかるらん」（寛平御時中宮歌合・三二・十七番　左）が見え、八代集においては、「あづまぢのさやの中山なかなかになにしか人を思ひそめけむ」（古今集・恋二・五九四・とものり・題しらず）、「あづまぢのさやの中山中中にあひ見てのちぞわびしかりける」（後撰集・恋一・五〇七・源宗于朝臣・からうじてあひしりて侍りける人に、つつむことありてあひがたく侍りければ）、「あづまぢのさやのなか山さやかにも見えぬ雲井に世をやつくさん」（新古今集・羈旅・九〇七・壬生忠岑・題しらず）の三首の歌がある。『新古今集』の歌は、『忠岑集』四七番に載り、また『古今六帖』第二、八四七番にも類似表現の歌がある（みぬ人ゆゑにこひやわたらん）。用例数はそれほど多くはないが、古今集時代に集中している感がある。また、「さやの中山」は、「中山」から「なかなかに」、あるいは、「さや」から「さやかにも」といった同音反復の序詞で用いられる。他にも、「かひがねをさやにも見しがけけれなくよこほりふせるさやの中山」（古今集・東歌・一〇九七・かひうた）のように、「さや」に見るという同音の語を用いた例もある。当該歌は、そのような技巧に拠らない点で、これらの用例とは一線を画す。なお、後世の「あづまぢやさやのなかやましげくともはやぬけいでよたちまちの月」（為忠家後度百首・三三一・兵庫頭仲正・立待月）は、当該歌の影響を受けて詠まれた歌と見られる。

「君」「きます」という表現は、『万葉集』に散見される。「けだしくも人の中言聞かせかもここだく待てど君が来まさぬ」（巻四・六八三・六八〇・大伴宿祢家持、交遊と別るる歌三首）、「思ほえず来まし君を佐保川のかはづ聞かせず帰しつるかも」（巻六・一〇〇九・一〇〇四・作村主益人が歌一首）、「あらかじめ君来まさむと知らませば門にやどにも玉敷かましを」（巻六・一〇一八・一〇一三・九年丁丑の春正月、橘少卿并せて諸大夫等、弾正尹門部王の家に集ひて宴する歌二首・右の一首、主人門部王）、「我が背子をこち巨勢山と人は言へど君も来まさず山の名にあらし」（巻七・一一〇一・一〇九七・山を詠む）という例がある。ただし、「君きまさねば」という句になると、『新編国歌大観』を検しても、平安期までの例は当該歌以外に二例しかなく、いずれも『古今和歌六帖』出典未詳歌、すなわち、「衣手に山おろし吹きてさむきよを君きまさねばひとりかもねん」（第一・四二六・山おろし）、「あまぐもにはねうちつけてとぶたづのたづたづしかも君きまさねば」（第六・四三五〇・つる）である。当該歌を含めたこれらの歌は、あるいは同一文化圏での詠作か。

四〇三一（しをり）

【本文】

行きかよふ山のほそみちいかなればしをりもみえであとのたゆらん

【校異】○みえて—みえす（て）（林）　○あと—路（宮）ふみ（黒・寛）

【語釈】○行きかよふ　常に行き来する。主語は作者。　○あとのたゆらん　「あとたゆ」は、人の行き来が絶える意。

【通釈】私が行き来している山中の細道は、いったいどういうわけで、道しるべも見えず、往来が絶えているのであろう。

【他出】なし

【考察】

「ほそみち」という語の勅撰集における初出は、『千載集』の「ましばかるをののほそ道あとたえてふかくも雪のなりにけるかな」（冬・

四六五・藤原為季・雪のうたとてよめる）である。平安中期の例は稀少で、私家集においても、「冬ごもり人もかよはぬ山ざとのまれのほそみちふたぐゆきかも」（賀茂保憲女集・一二三・ふゆ）を見出す程度である。いずれも道が雪に埋もれたために往来が絶えたことを詠んでいるが、当該歌は、季節を特定することなく、往来の絶えた理由をいぶかしむ歌になっている。

「行きかよふ」という語は、山路の他、恋路や黄泉路とも組み合わせられる。すなわち、「紅葉ばの散りしく時は行きかよふ跡だにみえぬ山路なりけり」（貫之集・八六・延喜十七年八月宣旨によりて）、「恋ひわびて打ちぬる中に行きかよふ夢のただぢはうつつならなむ」（古今集・恋二・五五八・藤原としゆきの朝臣・寛平御時きさいの宮の歌合のうた）、「ゆきかよふみちはなくともしでのやまことのはをだにふきもこさなん」（伊勢集・四五〇・御かへし）といった歌である。

「あとたゆ」という表現の勅撰集における初出は『後撰集』で、「しら山に雪ふりぬればあとたえて今はこしぢに人もかよはず」（冬・四七〇・式部卿あつみのみこしのびてかよふ所侍りけるを、のちのちたえだえになり侍りければ、いもうとの前斎宮のみこのもとよりこのごろはいかにぞとありければ、その返事にをんな）、「菅原や伏見の里のあれしよりかよひし人の跡もたえにき」（恋六・一〇二四・菅原のおほいまうちぎみの家に侍りける女にかよひ侍りけるをとこ、なかたえて又とひて侍りければ）という二首の歌が存する。一方、私家集においては、「あとたえてこひしきときのつれづれは面影にこそはなれざりけれ」（仁和御集・一三・また御）、「あと絶えてしづけきやどにさく花のちりはつるまでみる人ぞなき」（千里集・一一・落尽閑花不見人）、「としふかくつもれるゆきのあとたえてひとかよひぢのみえぬわがやど」（躬恒集・三二〇・ふゆ）などの例があり、古今集時代から用例が見出される。

四〇三五（花）

つらゆき

ちるはなにいへぢまどひてこのさとにわれはよねにぞながゐ（ひ）しける

【本文】

【校異】○つらゆき―おなし人（松・羅・林・田・黒・寛）同し人（和・宮）○いゐち―いゐ（ち）。（永）○よねにそ―よねこそ（田）よね（これ（朱））にそ（宮）まれにそ（黒・寛）○なかひゐ―長居（松・和・羅・宮）長ゐ（林・田・黒）・なかゐ（寛）

【語釈】○このさと　この人里。他所から来た者の視点からいう表現。○よね　「夜寝」（夜寝ること。とくに、男女が共寝をすること。同衾。）の意か。「宿（ヨネ）」（遊仙窟）（〔考察〕参照）。○ながゐ　底本「ながひゐ」を改める。同じ場所に長くとどまっていること。

【通釈】散る桜の花びらで、家への帰り道に迷って、この人里で、私は共寝をすることで長居してしまったよ。

【考察】

「このさとにたびねしぬべしさくら花ちりのまがひにいへぢわすれて」（古今集・春下・七二・よみ人しらず・題しらず）の類想歌である。この古今集歌について、金子元臣『古今和歌集評釈』（明治書院、昭和二年）は、「下句は、白楽天の詩句に『花下忘㆑帰因㆓美景㆒』の意」（八〇・八一頁）と指摘した後、『古今六帖』の当該歌を挙げる。もちろん、この白楽天の影響も指摘し得るであろうが、加えて、道に迷って神仙世界に入り、崔十娘と契りを結ぶという伝奇物語『遊仙窟』に、その発想の淵源

を求めることもできよう。そうすると、第四句に見える「よね」という語も、『遊仙窟』に見える「宿」の訓、「よね（夜寝）」の可能性を考える余地が出て来よう。ただし、この訓の平安期の例は未だ見出せない。後考を俟つ。

前掲の古今集歌にも用いられている「このさと」という表現は、他にも、「このさとにしるべに君もいできなむみやこほとりに我はきにけり」（伊勢集・三七五・京ごくなる人のいへにきて、かたたがふとて、そのわたりなる人に）、「此里にいかなる人か家ゐして山郭公絶えず聞くらん」（貫之集・四四一・山里にほととぎす鳴きたり）という例がある。いずれも、本来の居所から別の場所に赴いた先を指していう。

「ながゐ」という語も、勅撰集における初出は『古今集』である。「すみよしとあまはつぐともながゐすな人忘草おふといふなり」（雑上・九一七・みぶのただみね・あひしれりける人の住吉にまうでけるによみてつかはしける）の後は、『後撰集』にはなく、『拾遺集』に、「月影はあかず見るともさらしなの山のふもとにながゐすな君」（別・三一九・つらゆき・しなののくににくだりける人のもとに、つかはしける）という歌がある。また、春の花のために「ながゐ」するという例も、「あひおもはぬはなにこころをつけそめてはるのやまべにながゐくらしつ」（躬恒集・八八・春）、「玉鉾の道は猶まだ遠けれど桜をみればながゐしぬべし」（貫之集・九二・道行人さくらのもとにとまれる）など、古今集時代の歌人の私家集に見出せる。

【本文】

四〇三七（花）　　おなじ

たき（ち）がはのながれてこずはおもほえずみやまがくれの花をみましや

【校異】○おなし―貫之（松・和・羅・林・宮・田）○たちかは―たちしは（田）たち（き歟）かは（和・宮）○おもほえす―おもほえぬ（宮）

【語釈】○たきがは　山の谷間を激しく流れる川。底本「たちかは」を改める（【考察】参照。）。○こずは　動詞「来（く）」の未然形＋打消の助動詞「ず」の連用形＋係助詞「は」。順接の仮定条件。……ないならば。○みやまがくれ　奥山に隠れていること。

【通釈】山間の急流が、ここまで流れてこないならば、思いがけず奥山に隠れている花を見るだろうか。

【考察】

山の麓では桜の花が咲く時期はすでに過ぎているが、山間の急流が桜の花びらを麓まで運んで来ることによって、山奥には意外にもまだ桜が咲いているのだということを知るのである。『古今集』の「吹く風と谷の水としなかりせばみ山がくれの花を見ましや」（春下・一一八・つらゆき・寛平御時きさいの宮の歌合のうた）と同趣向であり、下句は全く一致する。

初句は底本「たちかはの」で、河川名「立川」が当てはまりそうではあるが、和歌における他例を未だ見出せない。内閣文庫蔵和学講談所旧蔵本・神宮文庫蔵宮崎文庫旧蔵本が傍書で「たきがは」の可能性を示唆している点も考慮し、本文を校訂した。

だが、「たきがは」という語にしても、和歌においては、『百人一首』歌として人口に膾炙している「せをはやみいはにせかるるたきがはのわれてもすゑにあはむとぞ思ふ」（詞花集・恋上・二二九・新院御製・題不知）をはじめとする後世の例を見出すにとどまる。もっとも、「滝河

起浪穿月舟（たきがはなみをおこしてつきのふねをうがつ）」（新撰万葉集・四二九）といった漢詩の例は見出せるのであるから、当該歌に「たきがは」の校訂本文を認めるならば、和歌における比較的早い例として位置付けられよう。

「みやまがくれ」という語は、『古今集』に、先の例の他、「わがこひはみ山がくれの草なれやしげさまされどしる人のなき」（恋二・五六〇・をののよしき・寛平御時きさいの宮の歌合のうた）、「かたちこそみ山がくれのくち木なれ心は花になさばなりなむ」（雑上・八七五・けむげいほうし・女どもの見てわらひければよめる）という歌がある。これら二例は、「み山がくれの草」「み山がくれのくち木」を自らの恋や姿かたちの比喩として用いている。「みやまがくれの花」そのものを詠む歌は、後の例ではあるが、「ちりのこるはなもやあるとうちむれてみやまがくれをたづねてしかな」（道信集・七五・三月つごもりの日、小一条の中将のもとより）がある。

四〇六〇（紅葉）

【本文】

つらゆき　十一首

色もまだみえぬもみぢはあしひきのやまみづよりやながれきつらん

【校異】なし

【語釈】○あしひきの　枕詞。ここでは「やまみづ」に付く。○やまみづ　山から流れ出る水。山下水。○ながれきつらむ　流れて来たのだろう。「つらむ」は完了した事態の推量を表す。

【通釈】（山の麓では）色もまだ見えない、紅葉した葉が流れ着いているのは、山下水によって（奥山から）流れて来たのだろうか。

【他出】

『和歌童蒙抄』第七、木部、六九一番

（秋　紅葉）　貫之

いろもかもみえぬもみぢはあしびきのやまみづよりやながれいづらむ

【考察】

山の麓では紅葉の時期はまだ先であるのに、紅葉した葉が流れ着いている。このことから、山奥では早くも紅葉しており、山下水が、その紅葉した葉を麓まで運んで来たのかと推測した歌である。

流れて来た紅葉から川の上流にある山の様子を推察するという発想は『万葉集』から見られ、「飛鳥川もみち葉流る葛城の山の木の葉は今し散るらし」（巻十・二二一四・二二一〇）の他、『古今集』にも、「この河にもみぢば流るおく山の雪げの水ぞ今まさるらし」（冬・三二〇・読人しらず・題しらず）といった歌が見出せる。

また、紅葉の色がまだ見えないことを詠んだ歌には、「いろにいでてまだみえぬまはおぼつかないまやまやまゆみのもみぢするとき」（坊城右大臣殿歌合・一四・宮内君・右）がある。

「やまみづ」の勅撰集初出は『後撰集』で、「ゆく方もなくせかれたる山水のいはまほしくもおもほゆるかな」（恋一・五九〇・よみ人しらず・はじめて女のもとにつかはしける）、「こがくれてたぎつ山水いづれかはめにしも見ゆるおとにこそきけ」（恋四・八六一・よみ人しらず・返し）の二首の歌が存するが、いずれも恋部の歌であり、当該歌のような季節感との結び付きは希薄である。八代集では他に用例はなく、次の用例の出現には『続後撰集』を俟たねばならない。私家集において

は、「やま水をてにむすびてもこころみむぬるくはいしのなかもたのまじ」（伊勢集・四三八）が早い例で、他には『恵慶集』にある、「ふるさとをこふるた本はきしちかみおつる山水いづれともなし」（五二・こひ）、「からにしきあはなるいとによりければやま水にこそみだるべらなれ」（一一七・あふみに、ひらといふところに、人人まかりて、だいどもいだして、うたよみ侍るに山がはのもみぢ）、「昨日までさえし山みづぬるければうぐひすのねぞしたまたれける」（二〇八・百首・春）といった三首の歌の存在が目立つ。『伊勢集』の歌、および『恵慶集』五二番歌は、『後撰集』の歌と同じく恋歌と見られるが、『恵慶集』一一七番・二〇八番は、自然詠として「やまみづ」そのものを詠んでいる点で、当該歌と軌を一にする。

四〇六四（紅葉）

【本文】

　からにしきたつたの山のもみぢばはくれなゐながらときはなりけり

【校異】〇集付―後撰秋下（黒）

【語釈】〇からにしき　唐織りの錦。舶来の錦で、紅色が交じった模様が美しく、紅葉にたとえて用いられる。ここでは、布の縁語の「たつ（裁つ）」という名をもつ「たつた（龍田）の山」に付く枕詞。　〇たつたの山　歌枕。紅葉の名所。龍田大社の西方、信貴山の南に連なる大和川北岸の山の総称。　〇ときは　常盤。永遠に変わらないさま。

【通釈】龍田山の紅葉の葉は、美しい紅色のままで、永遠に色が変わらないのだなあ。

【他出】

『歌枕名寄』巻第八、竜田篇、二三九〇番

　六帖

　からころも立田の山のもみぢ葉はくれなゐながらときはならなん

【考察】

「唐錦たつたの山も今よりはもみぢながらにときはならなん」（後撰集・秋下・三八五・つらゆき・題しらず）の異伝歌であろう。『古今六帖』ノートルダム清心女子大学図書館蔵黒川本は、当該歌に「後撰秋下」の集付を記し、両歌を同一歌と認識している。一方、〔他出〕に挙げた『歌枕名寄』では、当該歌の直前、二三八九番に、『後撰集』貫之歌を挙げ、両歌を並記する。

　『後撰集』本文は、龍田山の紅葉を「もみぢながらにときはならなん」（紅葉したまま永遠に色が変わらないでほしい）という願望を詠んでおり、きわめて意が介しやすい。これに対し、『古今六帖』本文では、「くれなゐながらときはなりけり」というように、永遠の紅葉だったのだという気づきを詠む。実際にはあり得ないこの内容を解するためには、たとえば、屏風絵に描かれた龍田山の紅葉を題に、寿ぎの歌を詠んだというような詠歌状況を想定する必要があろう。なお、『歌枕名寄』所収の当該歌本文の結句が、『後撰集』の歌本文と同じ「ときはならなん」という願望表現になっているのも、前述のような詠歌状況を設定することなく、和歌単独で解しやすい本文が志向された結果であろう。

四〇七六（紅葉）

【本文】

　もる山の峰のもみぢもちりにけりはかなき色のをしくも有るかな

【校異】○集付—玉葉雑上 貫之集（黒） ○はかなき色の—はかなき色に（林）

【語釈】○もる山　諸人の立ち入りを禁じ、番人を置いた山。とくに、近江国、現在の滋賀県守山市にある「守山」を指す。歌枕。紅葉の名所（［考察］参照）。○はかなき色　すぐに消えてしまう色。あっけなく散ってしまう紅葉の美しい色合いをいう。「はかなし」は、たよりなく、あっけない意。

【通釈】立ち入りが禁じられた守山の峰の紅葉も散ってしまったなあ。はかない色が惜しいことだよ。

【他出】

『玉葉集』巻第十六雑歌三、二二九一番

もみぢ葉を、といふ五文字を句のかしらにおきてよめる　貫之

もる山の峰のもみぢもちりにけりはかなき色のをしくもあるかな

『秋風集』巻第七冬歌上、四七六番

だいしらず　よみ人しらず

もるやまのみねの紅葉ばちりにけりはかなき色のをしくも有るかな

『歌枕名寄』巻第二十三、雑篇、六一八六番

（守山）

（峰）　貫之

もる山のみねの紅葉もちりにけりはかなき色のをしくも有るかな

右、もみぢばをといふ五文字を句のかしらにおきてよめる

『夫木抄』巻第十六冬部一、六四三〇番

（落葉）

題不知　読人不知

もる山の峰のもみぢば散りにけりはかなき色のをしくも有るかな

【考察】

本来ならば、紅葉狩りをして、近くで紅葉を愛でたいところであるが、出入りを禁じられた守山ではそれもできず、山を眺めているうちに、峰の紅葉も間もなく散ってしまった。美しくもはかないその紅葉の色が、なんとも惜しいと詠んだ歌である。『玉葉集』の詞書に拠れば、句頭五文字が規定された折句であったことが知られる。

「もる山」の紅葉は、勅撰集においても、「しらつゆも時雨もいたくもる山はしたばのこらず色づきにけり」（古今集・秋下・二六〇・つらゆき・もる山のほとりにてよめる）、「葦引の山の山もりもる山も紅葉せさする秋はきにけり」（後撰集・秋下・三八四・つらゆき・もる山をこゆとて）というように詠まれる。詞書を信ずれば、両歌ともに、貫之が、実際に守山に赴いた際に詠んだ歌である。当該歌も、『玉葉集』では貫之歌とされており、同所を想定して詠まれた可能性が高い。ただし、当該歌は、「もる山」の所在地認定よりもむしろ、番人が守っていて、近くで鑑賞できなかった「守山」の紅葉が散ってしまったのが惜しいという内容を、折句に仕立てるところに眼目がある。

「はかなし」という語は、「はかなくてすぐる秋とは知りながらをしむ心のなほあかぬかな」（陽成院歌合〈延喜十三年九月〉・一六・右）、「もみぢばを風にまかせて見るよりもはかなき物はいのちなりけり」（古今集・哀傷・八五九・大江千里・やまひにわづらひ侍りける秋、心地のたのもしげなくおぼえければよみて人のもとにつかはしける）というように、過ぎ行く秋や、風に散る紅葉などに用いられる。当該歌は、秋の紅葉を惜しむ歌であるが、紅葉の「色」を「はかなし」と見る表現は珍し

い。あるいは、峰の紅葉を遠景から眺める視点によって獲得したものか。

なお、紅葉ではないが、植物の「色」を惜しむ歌には、「ちりはててはななきときのはなればうつろふいろのをしくもあるかな」（内裏菊合〈延喜十三年〉・一・興風・左）がある。

四〇八三（紅葉）

【本文】

秋かぜにさほ山よりやちりきつるいろみえぬべき光たづねて

【校異】〇光―日かけ（松・羅・林・宮）日影（和・田・黒・寛）

【語釈】〇さほ山　大和国、現在の奈良市の北方、旧平城宮北東方の丘陵地。歌枕。紅葉の名所。　〇みえぬべき　見えそうな。「ぬべし」は、事態の生じることが確かに可能であると判断する意を表す。

【通釈】秋風に吹かれて、佐保山から散って来たのか。色がはっきり見えそうな光を求めて。

【他出】なし

【考察】

月の光が明るい秋の夜、どこからともなく美しい紅葉が散って来たことから、紅葉の名所である佐保山から秋風に乗って、その色がはっきり見えるような月の光を求めて来たのかと推量した歌と見た。

秋風が吹くと佐保山の紅葉を思うという歌が、『家持集』に、「あきかぜのふくにつけてぞおもほゆるさほのやまべはいまやもみづる」（二二七）と見え、また、同じ『家持集』の「ふくかぜにちるだにをしきさほ山のもみぢこきたれ時雨さへふる」（二六四）は、風に散る佐保山の紅葉を惜しむ歌である。『家持集』は、古今集撰者時代の歌をも含む平安期の成立と見られるが、このように、当該歌と表現内容に共通性が見られる歌をもつことには留意すべきであろう。

また、『恵慶集』には、佐保山の紅葉と風を詠んだ、「さほやまのなたてにあさきもみぢばをあたりのかぜはふかば吹かなむ」（一七〇・さほ山に、もみぢあさし、河原院歌合・二〇・慧慶法師・佐保山紅葉浅 右勝・第二句「なたてにうすき」・結句「ふきちらさなむ」）という歌や、実際に佐保山の麓で夜を明かすことになり、せっかくの紅葉を愛でることができないことを詠んだ、「佐保山の風の心もしらずしてもみぢ見ずとやこよひあかさむ」（一〇四・十月ばかり、はつせにまでてかへるに、日くれぬれば、さほ山のふもとにやどりて、夜なれば、もみぢ見えぬ心、人人よむに）という歌がある。

夜の間に紅葉を見るためには、秋の明るい月の光が必要である。「秋の月山辺さやかにてらせるはおつるもみぢのかずを見よとか」（古今集・秋下・二八九・よみ人しらず・題しらず）、「秋の月ひかりさやけみもみぢばのおつる影さへ見えわたるかな」（後撰集・秋下・四三四・つらゆき・延喜御時、秋歌めしありければたてまつりける）といった歌は、紅葉の葉の一枚一枚が見えるほどの秋の月の明るさを詠んでいる。

さらに、『陽成院一親王姫君達歌合』には、紅葉を月の光のもとに見ることを、「つきかげのやましたまでにさやけきはよるももみぢのいろをみよとや」（一・本）、「もみぢせぬあきのやまべのあらばこそつきのひかりをたづねてもみめ」（二・左）、「つきかげのさやけくみゆるさほやまのもみぢをかぜにまかせずもがな」（一四・右）と詠んだ例が見出せる。当該歌の、美しい紅葉の葉は佐保山から風に乗って来たものではないかという発想や、紅葉の色がよく見える光を求めるという表現は、

これらの歌合歌に通底するものがあろう。あるいは、文化圏を同じくする作か。

「散り来」という語は、つとに『万葉集』に、「春日野の萩は散りなば朝東風の風にたぐひてここに散り来ね」（巻十・二一二九・二一二五）、「誰が園の梅の花そもひさかたの清き月夜にここだ散り来る」（巻十・二三二九・二三二五・花を詠む）という用例が見える。勅撰集においても、初出は『古今集』で、「冬ながらそらより花のちりくるは雲のあなたは春にやあるらむ」（冬・三三〇・きよはらのふかやぶ・ゆきのふりけるをよみける）が見出せる。萩や梅の花について用いられているが、紅葉を詠む例は、「紅葉ばの散りこむ時は袖にうけむつちにおちなばきずもこそつけ」（寛平御時后宮歌合・一一一・右）の他、「もみぢばのちりくる見れば長月のありあけの月の桂なるらし」（後撰集・秋下・四〇一・よみ人しらず・月よに紅葉のちるを見て）、「下紅葉ちりくる秋のかぜごとにしられぬさきにそでぞつゆけき」（元真集・二二〇）、「もみぢばのやどにちりくるこの秋はうれしきそでにしぐれこそふれ」（能宣集・一七一・九月つごもりがたに、上臘なる人人あまたまできて、さけなどたうぶるついでに、おもふこころはべりて）などの例が見える。当該歌には「紅葉」の語はないが、上句の表現からそれとわかる。

附記

本稿は、同志社大学文化情報学部における二〇一三年度春学期の授業「文献講読」において採り上げた内容の一部である。河野光帆（四〇二八・四〇七六番）、多田梨華子（四〇三〇・四〇八三番）、濱本拓也（四〇三一・四〇六〇番）、浅井佐和子（四〇三五・四〇七六番）、稲垣周（四〇三五・四〇八三番）、高間裕貴（四〇三七・四〇六四番）、菅沼ひかり（四〇三七・四〇六四番）が、それぞれの担当歌についてレポートを執筆した。その後、これをもとに、「古典籍の保存・継承のための画像・テキストデータベースの構築と日本文化の歴史的研究」（同志社大学人文科学研究所第19期研究会第4研究、および科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号16K00469、二〇一六〜二〇一八年度）の一環として、さらに検討を加えた。

用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版Ver.2とともに、竹田正幸氏（九州大学大学院システム情報科学研究院）作成の文字列解析器〝e-CSA Ver.2.00〟を使用した。

最後に、資料を御提供くださった宮内庁書陵部・肥前島原 松平文庫・国文学研究資料館に厚く御礼申し上げる。

『古今和歌六帖』別出歌一覧 ―第六帖、4024〜4091番―

凡例

1、『古今和歌六帖』本文と歌番号は、『新編国歌大観』に拠る。作者名・詞書・左注がある場合は、当該歌のあとに（ ）を付して記す。

2、調査対象として、『新編国歌大観』から以下の歌集を選択する。『古今和歌六帖』の成立は十世紀後半と想定されるが、出典としては、やや後世の作品まで調査範囲を設定している。

第一巻　1古今和歌集～4後拾遺和歌集

第二巻　1万葉集～6和漢朗詠集

第三巻　1人丸集～81赤染衛門集

第五巻　1民部卿家歌合～61源大納言家歌合 長久二年、253紀師匠曲水宴和歌～269九品和歌、281歌経標式（真本）～285新撰髄脳290新撰和歌髄脳、347古事記～353風土記、371日本霊異記、372三宝絵、389土左日記～393和泉式部日記、414竹取物語～420落窪物語

第六巻　2秋萩集～5麗花集

第七巻　1奈良帝御集～36肥後集

3、別出歌は、『新編国歌大観』の巻数-通し番号を付した歌集名と歌番号で示す。

〈例〉3-19貫之355『新編国歌大観』第三巻19番目の『貫之集』355番歌

4、別出本文に異同のある場合は、句ごとに［ ］を付して記す。なお、漢字と仮名など、表記上の相違は指摘せず、有意の異同のみに限る。

5、『古今和歌六帖』所収歌には、別の歌集の歌との間で、さまざまな類似性を有するものがある。そのまま別出歌とは認めにくいものの、まったく無関係に作られたとも考えにくい場合には、〈参考〉と記し、波線を付す。

6、特定の別出歌が指摘できない場合や、十一世紀以降の作品にしか別出が見出せない場合は、いわゆる出典未詳歌として〈未詳〉と記し、傍線を付す。

別出歌一覧

木

4024 冬なれば春べをこひてうゑしきのみになるまでもかたまつ我ぞ

2-1万葉1709［ふゆこもり］［みになるときを］

4025 こととはぬくさ木なれどもうれしとやこの秋よりはいはでおもふらん（みつね）

7-5躬恒110［事とはば］［草木なりとも］［うれしとは］［この秋よりや］［いはでおもはん］、3-12躬恒459［今日からは］［くさきなりとも］［うれしとは］［いはでおもはむ］

4026 かれはてぬむもれ木あるを春はなほ花のたよりによくなとぞ思ふ（つらゆき）

7-7貫之33、3-19貫之856［花のゆかりに］

4027 桜ばなにほふともなくはるくればなどかなげきのしげりのみする（伊勢）

1-2後撰55、3-15伊勢集113［しげりのみます］

4028 たがためにこれるなげきをうちつけにいままでなどか花さかずして（おなじ）

〈未詳〉

4029 はるのの

（不明）

しをり

4030 あづま路のさやのなかやましげくとも君きまさねばおもかげもせじ

〈未詳〉

4031 行きかよふ山のほそみちいかなればしをりもみえであとのたゆらん

〈未詳〉

花

4032 なにはづにさくやこのはな冬ごもり今ははるべとさくやこのはな

1-1古今序、2-6和漢朗詠664

4033 ひさかたの光さやけきはるの日にしづ心なくはなのちるらん（とものり）

1－1古今84［ひかりのどけき］、3－11友則6［ひかりのどけき］

4034 行く水にみだれて花のちれるをかきえずながるる雪かとぞみる（つらゆき）
2－3新撰和83［みだれてちれる］［さくら花］［雪とみえつつ］

4035 ちるはなにいへぢまどひてこのさとにわれはよねにぞながゐしにける（つらゆき）
〈未詳〉

4036 あづさ弓はるの山べをこえくれば道もさりあへずはなぞ散りける（おなじ）
1－1古今115

4037 たちかはのながれてこずはおもほえずみやまがくれの花をみましや（おなじ）
〈未詳〉

4038 朝ぼらけした行く水はあさけれどふかくぞはなの色はみえける（おなじ）
1－2後撰130

4039 はるくればさくといふことをぬれぎぬにきするばかりの花にぞ有りける（おなじ）
1－2後撰98

4040 はなみれば心さへにこそうつりぬる色にはいでじとおもひしものを（みつね六首）
7－5躬恒361［うつりけれ］

4041 おきふしてをしむかひなくうつつにもゆめにも花のちるをいかにせん
3－12躬恒394、7－5躬恒40

4042 わがやどの花みがてらにくる人はちりなん後ぞこひしかるべき
1－1古今67、2－5金玉16、2－6和漢朗124、5－52前十五2、5－264和十種16、5－265和十体7、5－266三十人24、5－267三十六24、5－268深窓秘20、5－285新髄脳8、7－5躬恒263、3－12躬恒368［わがやどに］

4043 ふなをかにはなつむ人のつみはててさして行くらん方やいづくぞ
3－12躬恒374［さしてゆくかた］［いかでたづねむ］、7－5躬恒25［さして行くかた］［いかでたづねん］

4044 鶯はいたくな鳴きそにほひかにめでてわがつむはなならなくに
3－12躬恒349［うつりがに］、7－5躬恒2［うつりがに］［めでてわれつむ］

4045 花みればうつる心は色にいでてあだにやあやな人にしらるる（みつね）
7－5躬恒19［あだにあやなく］、3－12躬恒367［はるくれば］［あだにあやなく］

4046 をしめどもはなのちるらん人にくく物もいはでぞみるべかりける
3－12躬恒395［をしめばや］［あやにくに］、7－5躬恒41［をしめばや］［あやにくに］

4047 久方の空もくもらでふる雪は風にちりくる花にぞ有りける（みつね）
3－12躬恒379［そらもくもりて］

4048 こひしくはいかにせよとかかくばかりあだなる花のもとにねぬらん（伊勢）
7－10中務210［いかにせよとて］［かつちりて］

4049 としをへて花のかがみとなる水はちりかかるをやくもるといふらん（いせ）
1－1古今44、5－265和十体20、5－264和十種47、2－6和漢朗519［としごとに］、3－15伊勢集97［としごとに］、5－266三十人33［はるごとに］、5－267三十六33［春ごとに］

4050 はるごとに花のにほひはありなめどあひみんことぞ命なりける（そせい）
1－1古今97［花のさかりは］［あひ見む事は］［いのちなりけり］

4051 ふくかぜにあつらへつくる物ならばこの一枝はよきよといはまし
3－9素性39［あとらへつくる］、1－1古今99［このひともとは］

4052 をしと思ふこころはいとによられなんちるはなごとにぬきてとむべく（そ

せい）
1－1古今114［ぬきてとどめむ］、2－3新撰和75［ぬきてとどめむ］、3－9素性16［こころをいとに］［ぬきてとどめむ］

4053 こづたへばおのがはかぜにちる花をたれにおほせてここら鳴くらん
1－1古今109、3－9素性15［たれによそへて］

4054 はなの木も今はほりうゑしあぢきなくうつろふ色に人ならひけり（そせい）
1－1古今92［春たてば］、5－4寛平后7［春立てば］、2－2新撰万7［はなのきは］［はるたてば］、3－9素性4［はなのきは］［春たてば］

4055 はなのいろをあらはにめでばいろめきぬいざくらやみにをりてとりてん（おなじ）
1－3拾遺集355［あだめきぬ］［なりてかざさむ］

4056 花のごとよのつねならばすぐしてしむかしは又もかへりきなまし
1－1古今98

秋花

4057 みる人もなき野べなれば色ごとにほかへうつろふ花にぞ有りける（つらゆき）
3－19貫之154［みな人も］［なきやどなれば］［花にしかなく］

4058 やどもせにうゑならべてぞ我はみるまねく尾ばなに人やとまると（伊勢）
1－2後撰289［うゑなめつつぞ］、3－15伊勢集241［うゑなめつつぞ］［人とまるやと］

紅葉

4059 いもが袖まきもくやまの朝霧にしほふもみぢのちらまくをしも
2－1万葉2191［まききのやまの］［あさつゆに］［にほふもみぢの］

4060 色もまだみえぬもみぢはあしひきのやまみづよりやながれきつらん（つらゆき十一首）
〈未詳〉

4061 もみぢばのながるるときはたつた川みなとよりこそ秋はゆくらめ
3－19貫之238

4062 心とてちらんだにこそをしからめなどかもみぢを風のふくらん
3－19貫之276［などか紅葉に］、1－3拾遺集209［心もて］［などか紅葉に］、1－3'拾遺抄582［こころもて］［などかもみぢに］

4063 みる人もなくてちりぬるおく山のもみぢはよるの錦なりけり
1－1古今297、2－3新撰和82、2－5金玉30、2－6和漢朗316、5－266三十人16、5－267三十六15、5－268深窓秘54

4064 からにしきたつたの山のもみぢばはくれなゐながらときはなりけり
〈未詳〉

4065 山風のふきのまにまにもみぢばもおのがちりぢりちりぬべらなり
1－2後撰406［もみぢばは］［このもかのもに］

4066 うちむれていざわぎもこがかがみ山こえてもみぢのちらんかげみん
1－2後撰405

4067 ふく風にちりぬとおもふをもみぢばのながるる滝のともにおつらん
3－19貫之43［散りぬとおもふ］

4068 もみぢ葉の散りしくときは行きかよふあとだにみえぬ山路なりけり
3－19貫之86

4069 あしひきのやまかきくもりしぐるれどもみぢばかりぞ照りまさりける
1－3拾遺集215［紅葉はいとど］［てりまさりけり］、1－3'拾遺抄136［もみぢはいとど］［てりまさりけり］、3－19貫之27［山かきくらし］［紅葉

は猶ぞ］
4070 ながれくるもみぢばみればからにしきたきのいとしておれるなりけり
3－19貫之103、1－3拾遺集221［滝のいともて］、1－3'拾遺抄584［もみ
ぢをみれば］
4071 やまちかき所ならずは行く水ももみぢせりとぞおどろかれまし（つらゆき）
3－19貫之368
4072 たつた川秋にしなれば山ちかみながるる水ももみぢしにけり
1－2後撰414
4073 みなそこにかげしうつればもみぢばのいろもふかくやなりまさるらん（つ
らゆき）
3－19貫之26
4074 から衣たつたのやまのもみぢばははたものもなきにしきなりけり（おなじ人）
1－2後撰386
4075 秋風のふきにし日よりおとは山みねのこずゑも色づきにけり（おなじ）
1－1古今256、7－7貫之86
4076 もる山の峰のもみぢもちりにけりはかなき色のをしくも有るかな
〈未詳〉
4077 たちとまりみてをわたらん紅葉ばは雨とふるとも水はまさらじ（みつね五首）
1－1古今305、5－266三十人27、5－267三十六27、5－269九品和7、7
－5躬恒119、3－12躬恒468［うちわたり］［もみぢばの］
4078 秋のよのながゐをやせんはかなくてもみぢのかげに日を暮しつつ
3－12躬恒469［もみぢの川に］、7－5躬恒120［もみぢの河に］
4079 風にちる木木のもみぢは後つひに秋の水こそおとしはてけれ
3－12躬恒470［あきのもみぢは］［たきのみづこそ］、7－5躬恒202［秋
のもみぢの］、7－5躬恒121［秋のもみぢば］［たにの水こそ］［音はして
けれ］
4080 風吹けばおつるもみぢは水きよみちらぬかげさへそこにみえつつ
1－1古今304、7－5躬恒278
4081 をしめどもつひにちりぬるもみぢゆゑふる雨風に物をこそおもへ
3－12躬恒155［ふかぬ風にも］、7－5躬恒141［ものおもふかな］
4082 しらつゆもしぐれもいたくもる山はしたば残らずもみぢしにけり（ただみ
ね三首）
3－19貫之813、1－1古今260［色づきにけり］、2－6和漢朗305［いろづ
きにけり］
4083 秋かぜにさほ山よりやちりきつるいろみえぬべきひかげたづねて
〈未詳〉
4084 あだなりと我はみなくにもみぢばをいろのかはれる秋しなければ
1－2後撰390、3－13忠岑11［もみぢばの］
4085 おそくとくいろづく秋のもみぢばはおくれ先だつ露やおくらん（とものり）
1－2後撰381［色づく山の］
4086 このはちるうらになみたつ秋なればもみぢに花も咲きまがひけり
1－2後撰418、3－10興風18［うらにたつなみ］［さきまざりけり］、3
－10興風61［そらにたつなみ］［さきまじりけり］
4087 つれもなく成行く人のことのはぞ秋よりさきのもみぢなりける（むねゆき）
1－1古今788、5－267三十六96、3－17宗于2［ことのはや］［もみぢな
るらん］
4088 もみぢばのながれざりせばたつた川水のあきをばたれかしらまし（これのり）
1－1古今302、3－16是則18

4089
かりがねのなくなるなへにからころもたつたの山も紅葉しにけり（人丸）
1－2後撰359［なきつるなへに］［たつたの山は］、3－3家持244［たつたのやまは］［もみぢしぬらし］、2－1万葉2198［きなきしなへに］［たつたのやまは］［もみちそめたり］、3－1人丸129［なきにしともに］［たつたの山は］［色づきにけり］

4090
たつたがはもみぢばながる神なびのみむろの山にしぐれふるらし（ならのみかど）
1－1古今284、3－1人丸178、5－266三十人6、5－416大和254、1－3拾遺集219、2－5金玉33［紅葉ながる］、2－3新撰和78［もみぢ葉ながす］［あられふるなり］

4091
たてもなくぬきもさだめぬをとめらがおれるもみぢにしもふるなゆめ
2－1万葉1516［ぬきもさだめず］［おるもみちばに］［しもなふりそね］